［論文］

社会システム理論における社会的包摂

――盲点の観察としての芸術と学問――

矢 崎　慶 太 郎 *

本論の目的は，ニクラス・ルーマンの社会システム理論のパースペクティブから社会的包摂のメカニズムを考察することで，ソーシャル・キャピタル論や一般的信頼理論とは異なる包摂のモデルを説明することである．ソーシャル・キャピタル理論においては，人々の信頼関係，規範やネットワークの側面から社会的包摂が説明されるが，ソーシャル・キャピタルが排他的な行動の原因にもなるという負の側面をどのように回避するかが明らかにならない．それに対して社会システム理論は，社会的包摂を「観察」の原理から説明し，社会システムのなかで生じる「盲点」をいかに観察するかという点から説明する．より広い範囲の信頼関係やネットワークの構築ではなく，むしろあらゆる人間関係において生じうる排他性への反省能力が社会的包摂を促進する．こうした視点から本論は，社会的包摂の規定要因として，個人のレベルでは社会的関心や好奇心の高さ，また社会レベルで見れば，芸術システムと学術システムがより効率的に作動するほど，社会的包摂への理解が促進されるということを理論的に提示する．

キーワード : 社会的包摂，社会システム理論，ニクラス・ルーマン，ソーシャル・キャピタル

1　はじめに

近年，社会科学においては，ソーシャル・キャピタルが個人の幸福にとっても社会全体の安定にとっても極めて重要な役割を持つことが論じられてきた．ソーシャ

* 専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センター ポスト・ドクター　kei.yzk.15@gmail.com

ル・キャピタルとは，パットナムによれば，「信頼・規範・ネットワーク」によって定義される（Putnam 2001）．それは地域の強いコミュニティ活動，様々な人々とのネットワーク，他者に対する絆や信頼，いますぐ見返りがなかったとしても相手のために何かすれば巡り巡って自分に何らかの利益が戻ってくる互酬性の規範によって形成されるのである．このようなソーシャル・キャピタルは，市民社会の発展に大きな役割を果たし，社会から孤立した人々を包摂し（Bates and Dacia 2004），社会全体を安定化させる．この意味で，社会的包摂の万能薬である．

しかしソーシャル・キャピタルにはネガティブな側面があることも指摘されてきた．それは一方では互酬性の規範を生みだすかもしれないが，他方である種の同調圧力を生みだしたり，別の集団に対する排他性を強める可能性がある（Portes 1995）．もしソーシャル・キャピタルにも何らかの排他性が必然的に付随するなら，ソーシャル・キャピタルをいくら社会的に促進しても，別の排除対象が新たに生み出されつづけるだけである．

ソーシャル・キャピタル理論に対して，社会学者ニクラス・ルーマンに代表される社会システム理論は，社会的包摂のためにはどんな万能薬も存在しないということを出発点にしている．どのような方法を用いても，すべての人を包摂することなどできないのであり，何かを包摂すると必ず何かを排除することは避けようのないことである．したがって，社会的包摂のために重要なのは，どれだけたくさんの人と信頼関係やネットワークを結ぶかではなく，むしろ集団との結びつきから距離を置き，その集団がもつ排他性についてどれだけ自覚的・反省的になるかという観察能力にかかっている．

本論では，第 2 章においてソーシャル・キャピタル論の負の側面について考察し，どんな排他性も伴わない包摂メカニズムを想定することがいかに困難であるかについて論じる．そして第 3 章においては社会システム理論の概要を説明し，社会的包摂を集団との結びつきの問題ではなく，ある集団や社会に対する観察能力の問題に還元する．第 4 章では，実際に近代社会がどのように包摂と排除を行っているのか，そのメカニズムについて説明する．第 5 章では，より包摂能力を社会全体で高めるにはどのような方法を取るべきかについて考察する．とくに社会的包摂の問題を観察能力の問題に還元するアプローチに基づき，本論では，社会システム理論がどれほど芸術や学問の社会期役割を社会的包摂の土台とみなしているかについて論じる．

2　問題の所在：ソーシャル・キャピタルの負の側面

ソーシャル・キャピタルのもつネガティブな側面については，Portes（1995）が論じている．強固なソーシャル・キャピタルによって結束した集団が，社会全体に対して排他的な姿勢を取ることがある．例えば，アメリカにおいて強いソーシャル・キャピタルをもった移民集団（エスニック・グループ）が，その強い結束から市場を独占してしまい，他の人々（outsiders）の参入を妨げてしまう．また，ソーシャル・キャピタルは，同調圧力（conformity）や監視の目を生み，個人の自由を制限してしまうこともある（Portes 1995: 15-7）．

ソーシャル・キャピタルの研究者たちは，このような負の作用が起こる原因を，信頼が及ぶ範囲（radius of trust）の狭さにもとめている（Fukuyama 2001）．つまり，家族や友人といった狭い範囲しか信頼することのない人びとによって形成されたソーシャル・キャピタルは，その利益を一部の狭い集団にしか還元しないために排他性を伴うのである．Fukuyama は，その事例としてマフィアや Ku Klux Klan（白人至上主義団体）をあげている（Fukuyama 2001: 8）．あるいは Putnam が提示したように，ソーシャル・キャピタルには 2 つの種類があり，同質的な人びとによって構成された結束型（濃密な紐帯）と，市民団体や環境保護団体，趣味サークル等，社会的に異なる背景をもった人々をつなげる橋渡し型（薄い紐帯）のソーシャル・キャピタルとに区分できる（Putnam 2001）．

とくに薄い紐帯によって培われるより広範囲に及ぶ人びとへの信頼は，量的調査においては一般的に，「ほとんどの人びと（most people）への信頼」がどの程度あるのかという尺度から測定される（Fukuyama 2001）．

しかしこのような一般化された信頼は，果たしてどの程度，異なる人々へ包摂的な効果を持つだろうか．それは本当にすべての社会メンバーに対して包摂的に作用するだろうか．ポピュリズム研究では，一般化された「人びと（people）」という概念が，いかに多義的な意味合いを含んできたかについて指摘されてきた（Pelinka 2012）．例えばアブラハム・リンカーンの有名なスローガン「government of the people, by the people, and for the people（人民の人民による人民のための政府）」は，政治がより広範囲に渡る「人びと」のために行われるべきだという，今日では誰もが知る民主主義を支える理念である（Pelinka 2012: 9-10）．それは，王や貴族による少数支配からの脱却を意味し，ソーシャル・キャピタルが想定するような広い範囲の「人びと」の利益を政治的に正当化する．しかしこの「人びと（people）」には，アメリカ先住民やアフリカ系アメリカ人，そして女性は含まれていなかった．あるいは旧東

ドイツの人びとは，独裁的な政府に対して「我々は人民である（Wir sind das Volk）」というスローガンとともに民主主義を要求するデモを行った．しかしこの「Volk」（people）は，東西統一後，すぐにナショナリスティックな意味合いに変化し（Pelinka 2012: 14），現代ではこのスローガンは移民の排斥を正当化する象徴となっている．歴史的に見ると，「people」という広範囲で抽象的な概念が，狭い範囲の人びとへの信頼しか示さず，その結果，一部の社会的少数者を忘却あるいは排除することは珍しいことではない．

「ほとんどの人びと」という概念のもつ両義性は，社会調査のなかでも指摘されてきた．見知らぬ人よりも友人などの顔見知りを信頼している人のほうが「ほとんどの人」を信頼しやすい傾向にある（Sturgis and Smith 2010）．広範囲な人びとへの信頼は，狭い人間関係を脱したところにではなくその延長上にあるのであり，両者は不可分なのである．「ほとんどの人」への信頼が，実際には身近な人間への信頼しか測定していないという傾向は，東アジアの儒教社会において西側社会よりも強く見られることも指摘されている（Delhey, Newton, and Welzel 2011）．

「ほとんどの人びと」がもつ両義性を回避するために，「見知らぬ人びと（strangers）への信頼」という尺度を代わりに用いるべきだという見解もある（Naef and Schupp 2009）．この尺度は，狭い範囲の人びとへの信頼が，一般化された人びとへの信頼に含まれるのを防ぐのに役立つ．しかしこの種の信頼は確かに広範囲に及ぶものかもしれないが，もはや社会的包摂にはほとんど役立たないほどに「薄い」可能性がある．ほとんどの人びとへの信頼と見知らぬ人びとへの信頼が，居住地域の問題解決能力の評価に与える影響を比較すると，ほとんどの人びとへの信頼がどちらにもポジティブな効果を持つのに対して，見知らぬ人びとへの信頼はどちらにも有意な効果を持たなかった（Yazaki 2018）．「見知らぬ人びと」という抽象的信頼は，もはや抽象的すぎて，近所などのコミュニティレベルでの現実的な問題解決には効果を及ぼさない．こうした議論は，ソーシャル・キャピタル論の中では意外なものかもしれないが，社会学の古典的理論では市民的無関心（civil inattention）として論じられてきたことでもある（Goffman 1964: 84）．電車やストリートのように見知らぬ人々が集まる場所においては，たとえ見知らぬ怪しい人がいたとしても敵意を示してはならないが，同時に決して相手に深く込み入るような話をしてはならず無関心も示さなければならない．市民的無関心は，確かに見知らぬ人をいきなり排除しないという意味では包摂的だが，それはもはや一般的に私達が社会的包摂という概念のもとで考えているような何らかの共同性とは程遠いものになっているどころか，「孤独」と表裏一体のものである（Bauman and May 2001: 40）．

信頼の及ぶ範囲を基準にして，結束型のソーシャル・キャピタルと橋渡し型のソーシャル・キャピタルがあると区別することは重要であるが，後者のソーシャル・キャピタルにさえ排他性を持ちうる可能性があったり，そもそも市民的無関心のようにもはや包摂的とは呼べないほど薄い紐帯としてしか機能しない可能性がある．そのように考えると，橋渡し型のソーシャル・キャピタルを社会的包摂の万能薬と見なすことはできない．

こうした点から，万能薬の存在を必要としない社会的包摂の枠組みを考察する必要がある．以下では，社会システム理論からその可能性について模索したい．

3　社会システム理論の概要

ニクラス・ルーマンは，社会的包摂の問題について万能薬は存在しないという点から出発している．どんな社会的排除も伴わない社会的包摂は存在しない（Luhmann 1998: 621）．このような排除の不可避性という前提は，彼の理論の根底にある「観察（Beobachtung; observation）」の原理（Luhmann 1995: 241）から導き出されたものである．観察とはあるものを別のものから区別することである（Luhmann 1997: 92）．何かを見るということは，何か目に見えない**盲点**を作りだすことと同義である．例えば写真の撮影は，ある光景を可視化するが，それはフレームの外にある世界を不可視化してしまうことでもある．撮影によって生じるこうした限界を補完するために，撮影枚数を何百枚にも増やしたり，代わりに動画を撮影することはできる．しかしどれだけ回数を増やしたところで，記録されない不可視の世界が残り続けることに変わりはない．写真は世界を可視化すると同時に不可視化するのである．ルーマンは，社会的包摂もこのような観察の原理に従属すると考えた．すなわち包摂とは観察可能・可視的（sichtbar）なものであり，排除とは観察不能・不可視的（unsichtbar）なものである（Farzin 2008）．そして何かを包摂（可視化）することは，何かを排除（不可視化）するのと同義なのである．

このような排除なき包摂の不可能性は，観察という抽象的な原理のみならず，近代社会の特徴からもルーマンは説明している（Luhmann 1998: 633）．つまり現代の社会そのものが複雑になっているために，社会全体をまとめるような価値観や，社会全体をコントロールするシステムは存在できなくなり，それだけいっそう完全な包摂は不可能になるのである．以下ではルーマン理論における前近代から近代へと移行するプロセスを説明することにしたい．

近代以前の社会，生まれによってすべてが決まる階層分化社会においては，社会

はずっとシンプルなものと見なされた．貴族たちの集まる「宮廷」は，英語やドイツ語で「社会」と言ったり，フランス語では「世界」とさえ言ったように，一部の上層たちを記述するだけで社会全体を表すことができると考えられてきたのである．確かに農民が貴族になるといった階層間の移動は極めて困難であり，不平等（階層間の排除）は構造的に生み出されていた．しかし，農民であれ商人であれ貴族であれ，家柄が諸個人の生き方も社会生活も決めたのであり，すべての階層の人びとは，階層への所属を通じてそのまま社会的に包摂された（Luhmann 1998: 686-8）．このような時代には，若者は自分の居場所がどこにあるのかというようなアイデンティティの悩みを抱えることはありえなかった．

それに対して，近代社会においては，どの家に生まれたかということは社会的な意味を持たなくなるだけでなく，自分と相手の所属する階層に応じて行動を変えるなどという必要はなくなる（Schwinn 1998: 5）．社会は階層ではなく，どのようなサービスを提供するのかという機能性に応じて細分化（differenziert）される機能分化社会となる．つまり政治，経済，法，マスメディア，宗教，芸術，学術，医療，教育，恋愛，家族等，それぞれの機能システムがそれぞれの社会的役割に応じて分化・専門化する．その際に，階層社会と決定的に異なるのは，社会に序列的関係が作られないということである．各機能システムは自律的に作動するだけであり，これらの諸機能システムのうちどのシステムが他のシステムよりも重要かといった序列を作ることはない．こうした社会秩序においては，かつての宮廷や上流社会のように社会全体を代表する場所は存在しなくなるのである（Luhmann 1998: 801-2）．諸機能システムを包括的にコントロールすることはできないゆえに，これらの機能システムを超えた普遍的な社会的包摂も不可能である．それぞれのシステムはそれぞれの役割に応じて包摂するだけなのである．そして諸機能システムは，もちろんそれぞれの観察によって作動している以上，常に盲点を持ち排除を行いもするのである．

以上をまとめると，社会システム理論が，どんな排除をともなわない完全包摂を想定しない理由は，(1)「観察」という行為そのものが絶えず盲点を生みだしてしまうためであり，さらに（2）近代という高度に専門化した社会は，全体性を喪失し，それゆえに完璧な包摂システムを持つことができないためである．もちろんどんな社会的包摂の試みも結局は無意味であるということを主張することがこの論文の目的ではない．第 4 章では，近代社会が引き起こす包摂と排除の両方のメカニズムをより詳細に明らかにし，第 5 章ではそのメカニズムをもとに，どのような社会的包摂の試みが可能なのかについて考察する．

4　近代社会における包摂と排除

近代社会における諸機能システムがもつ最も重要な包摂原理は，あらゆる階層を超えて，すべての人のためにすべての人を「パブリック（Publikum）」として可視化する（Stichweh 1988: 268）という点にある．政治システムにおける国民や芸術システムにおける鑑賞者，あるいは経済システムにおける消費者等，機能システムにおいてはその受け手は極めて抽象的な公衆（public）として一般化される．誰もが参加できるという前提が機能システムの特徴である．福祉国家や法治国家，義務教育等は，すべての人の包摂を前提としたシステムを運営するという理念である．機能システムにおける包摂の事例として Stichweh は，近代医療システムを例示している．医療が発展したのは宮廷ではなく，都市においてより多くの人びとが利用したホスピタルであった（Stichweh 1988: 263-4）．おそらく宮廷医では高貴な身分の人間を前に対してもメスを入れて手術する技術を充分には発展させられなかった．サービスの受け手が「患者」としてあらゆる家柄を無視して一般化され，患者がたんに臓器から構成される「肉体」として抽象化されたからこそ飛躍的な進歩を遂げたのである．

しかし諸機能システムは，包摂の対象という意味ではすべての人間を普遍的に包摂しても，その機能性に基づき限定的であることは上記の例からも明らかであろう．医者は，すべての人間を患者として包摂するが，しかし医療というサービスに関してのみであり，例えば恋愛関係の悩みや就職の問題，あるいは諸個人のアイデンティティに関しては（仮に精神的な病気として認定されない限り）包摂しない．この意味で**機能システムは，普遍的だが限定的**なのである．

社会的排除が起こるひとつの原因として，Stichweh は**専門家／公衆のあいだの非対称性**を指摘している．芸術システムにおける制作者／鑑賞者のように，あらゆる機能システムにおいてはサービス側（Leistungrolle）／受け手としての聴衆側（Publikumsrolle）の役割が分化して，そしてこれに対応するかたちでプロフェッショナル（専門家）／クライアントという役割が生まれてくる．しかしまさにそこでの極めて抽象的・一般的なパブリックという前提が実際の顧客たちの多様性を不可視化してしまう（Stichweh 2016: 24-8）．例えば企業がいちど顧客のニーズを大量消費にあると観察するや，より安価な製品を提供しようとするだろう．しかし顧客たちのなかには安いものより安全なもの，環境によい製品を望む人が出てくる．そうなれば多くの企業は顧客の多様なニーズにあわせて製品を作らなければならない．しかし他方で顧客の個別的なニーズすべてに合わせることは不可能でもある．おそ

らくカスタマーセンターにおいては，顧客の様々な個別的なニーズのあいだで板挟みになることも珍しくないであろう．機能システムがクライアントを一般化するがゆえに，医療における自己決定の問題や，教育サービスの多様化等，クライアントの現実を観察できなくなるという問題はいたるところで起こっている．

社会的排除が起こるもうひとつの原因として，システム理論の研究者は，**機能システムの高度な自律性とその結果としての無関心**ということを挙げている（Hellmann 1989）．諸機能システムは，その自律性から自分自身が管轄する社会領域にのみ関心を持ち，それ以外には無関心である．政治家は一切投票に来ない人間の意思をどれだけ観察できるだろうか．企業は，生産者としても消費者としても能力のない人間，つまり貧困を観察する能力をほとんど持たないであろう．あるいは環境問題のように自然環境に与える負の影響も，排出権取引などによって経済的な関心に惹きつけられない限り，企業は全くの無関心である．

以上をまとめると，諸機能システムが引き起こす排除のメカニズムとして，各機能システムの限定性，専門家／公衆の非対称性，自律性による無関心が挙げられる．しかしこの種の問題は，他の機能システムがカバーすることによって，解決可能である．失業（経済システムからの排除）は，社会保障（失業保険や生活保護）など政治システムによって解決可能であるし，顧客の多様なニーズを読み取れないことにより生じる排除や自律性による無関心の問題（経済システムにおける環境問題）は，社会運動という機能システムによって強制的に専門家に対する批判を導入することで解決可能である（Hellmann 1989）．この意味で，近代社会における包摂は，様々な機能システム間の相互連携による多元性（Multiinklusion）が重要になる（Nassehi 1997: 620）．

しかしより深刻な問題は，ルーマンの指摘したように，どの機能システムからも観察されないという完全排除が生じうることである（Luhmann 1995）．例えば路上生活する家庭に生まれ，ID カードが持てなかった結果，教育を受けられなくなり，また労働市場への参加も不可能となり，さらに投票する権利もないために政治参加も不可能になるというように，あるシステムからの排除が別のシステムへの排除を生みだすという連鎖が起こり，その結果，すべての機能システムにとってある人が完全に不可視になってしまうことさえありうる．ルーマンがここで想定しているのは，完全排除の象徴としてのスラム街である（Luhmann 1997: 259-60）．機能システムは，どのような排除も伴わずに包摂することはできない．しかしそれとは逆に，近代社会においては，どの機能システムからも包摂されない完全排除というものが存在しうるのである．この排除が深刻なのは，どの機能システムからも観察されない以上，

いかなる包摂もありえないという点にある．

機能システムによる排除の連鎖はいかにして起こりうるのか．これについてルーマン自身は説得的な回答を与えていない．しかし，排除の連鎖に巻き込まれる人が全くランダムに生じているということはありえない．Kronauer がシステム理論を批判的に検討するなかで指摘しているように，人種や階層，性別などの構造的不平等が連鎖的排除につながっていることは否定できない（Kronauer 1998: 214, Geenen 2013: 503）．またルーマンが想定するように，機能システムが常に階層に対して対立的だったわけでもない．歴史的に見ても，近代初期においては，官僚や商人として（階層に依存しない機能システムのなかで）活躍した市民階級は，まず何よりも貴族になることを望んだのであり，機能システムと階層は共犯関係にあった（Schwinn 1998: 9）．さらに Nassehi によれば，諸機能システムが，すべての人に対して平等であることを構造上規定してしまっていることが，逆に構造的不平等に対する無関心を引き起こしている（Nassehi 2004: 114）．今日の労働市場は（男女雇用機会均等法に基づき）男女平等を前提にしている．しかし実際の不平等は，消えてなくなるわけではなく，さらに女性の排除が求人票などに公然と明記されていた時代に比べれば，遥かに見えづらい状況のなかで行われる．こうして構造上の平等が，実際の不平等を隠蔽し，不可視化してしまうというパラドックスが起こりうるのである．近代社会が，まさに階層を否定する平等原則という構造のもとで，階層の存在を隠蔽しうるのである．

以上の排除メカニズムを要約すると，機能システムにおける包摂の限定性，専門家／公衆のあいだの非対称性，自律性と無関心から生じる排除は，機能システムに内在する盲点が原因となって生じる．つまり機能システムがいくら効率的に作動しても，不可避的に生じてしまう排除である．この種の排除は，しかし，他の機能システムによる多元的なカバーによる解決は可能である．それに対して，連鎖的排除はすでにいかなる機能システムにも観察されないために機能システムによって解決不能であり，このような連鎖的排除は（近代社会においても残存する）階層分化によって引き起こされる．Schwinn（1998）が主張するようにこの種の階層性は，教育システムの改革によって解決可能かもしれないが，構造的に近代社会の諸機能システムの視界から抜け落ちやすいという点で前途多難である．

このような社会システム理論のパースペクティブを前提にしたうえで，次のような問いが提示されるべきであろう．近代社会における排除は，たんに現状の機能システムの包摂能力に任せているだけで解決可能なのだろうか．特に 21 世紀以降，劇的に進展するグローバル化のなかでこれまで社会包摂の中核となってきた福祉国家

モデルが弱体化するなか，はたして従来どおり諸機能システムによる包摂だけで社会的排除は減少するのかという問いが出てきたからである（Bude and Willisch 2006: 7-8）．また 21 世紀におけるソーシャル・キャピタル研究の高まりの背景には，既存の機能システムでは充分に社会的包摂ができていないのではないかという懸念があるのではないだろうか．そこで以下では，上記の包摂／排除メカニズムを考慮した上でいかにして社会的排除を克服できるかということについて考察したい．

ソーシャル・キャピタルの研究が注目を集める背景として，機能システムがもたらす分配が非効率的であるという点が挙げられるであろう．官僚制が提供するサービスはより広い範囲の人びとへ向けられたものであるが，その分配は厳格で非効率的であり，移民などの一部の人間を包摂しきれていない．そこである集団をより広い社会制度へと結びつける，例えばリンケージ型のソーシャル・キャピタルが必要になる（Woolcock 1998）というわけである．

しかし社会システム理論的パースペクティブから見ると，ソーシャル・キャピタルによる包摂には，それでもまだリスクがある．ルーマン自身は，ソーシャル・キャピタルに関する言及を全くしていないが，社会的包摂の問題に関して，「互酬性ネットワーク」（Reziprozitätsketten, Netzfreundschaften）について語っている（Luhmann 1995）. 彼によるとこのネットワークは対面関係に基づき, 互酬性をその資源とする．自分が助ければいつか助けられるが，逆に自分が助けなければ誰からも助けられなくなるというコミュニケーション構造のなかで，肯定（協力）を容易にし否定を困難にする．しかし互酬性ネットワークは，対面関係に基づいている以上，機能システムのようにすべての人を対象にした普遍的（universalistisch）なものではなく一部の友人だけに限られた部分的なものである（Luhmann 1995: 251-2）．ルーマンにとって互酬性ネットワークが発生する要因は，家族との関わりだけでは生活を送れない場合，かつ機能システムがうまく機能していない場合である．彼にとって，互酬性ネットワークは，機能システムの包摂が不充分なときにその代理を務める．しかしこのことに対する彼の評価はネガティブであり，それは機能システムの「パラサイト」であるとまで述べている（Luhmann 1995: 251-5）．彼にとって見ればときに互酬性ネットワークは「汚職（Korruption）」や犯罪までをも可能にし，機能システムの資源を盗んでしまう．本論では，必ずしも互酬性ネットワークは機能システムの利害と対立するものではないと位置づけたい．互酬的な人間関係は，ときに犯罪集団を形成するかもしれないが，投票を促すこともあるように機能システムによる包摂をより潤滑にすることは多くの研究で指摘されていることである．しかし互酬性ネットワーク／機能システムという 2 つの包摂の選択肢を並置してみると，ソーシャ

ル・キャピタルは明らかに対処療法的であるとも言える．例えば福祉サービスについての情報が住民に充分に告知されている地域に比べて，告知が不徹底な地域ほど，情報を知らせてくれる近隣住民や公務員とのネットワークの価値は上昇するだろう．しかしそもそも情報がすべての住民にわかりやすく伝わっていればこの種のネットワークは不要であったはずであり，行政による非効率な情報伝達をソーシャル・キャピタルで補う状況では，ソーシャル・キャピタルにアクセスできない住民は福祉サービスを受けられないままである．

したがって，機能システムの機能不全や非効率性をソーシャル・キャピタルによって補うことで社会的包摂を高めるという方法には限界あるいはリスクがあるということができる．そこで本論は互酬性ネットワークからは距離をおいたかたちで，いかにして社会的排除を縮小可能かについてシステム理論の観点からもう一度，考察することにしたい．

5　排除の縮小：芸術と学問の社会的機能

ルーマンの社会システム理論は，社会的包摂の問題を観察の問題へと還元するところにその特徴がある．社会的包摂は，諸機能システムが観察によって不可避的に生じてしまう**盲点をどれだけ観察するか**ということに委ねられている．

このことを出発点にしたルーマンは「包摂と排除」（Luhmann 1995）の論文において包摂の問題を考える最初のきっかけとして取り上げたのが，芸術である．包摂問題を芸術から出発して考えるというのは他の包摂研究と比べても極めて特異であるが，彼の理論構成からすればこれは不思議な事でも何でもない．なぜなら，社会システム理論においては，包摂／排除は，観察（とそれによって生じる盲点）のあり方の問題であり，そして彼にとって芸術は観察のあり方そのものに専門的に取り組む社会システムだからである．ルーマンによれば，芸術システムの社会的機能（芸術が専門的に提供するサービス）とは，「あなたが見ていないものを私は見る」（Luhmann 1990a）という点にある．ファンタジーであれ，あるいは現実の社会的格差，他人には容易に打ち明けられない心の悩みであれ，まだ誰にも観察されていないものにいかにして焦点を当てることが芸術の機能なのである．ルーマンが社会的包摂論において例として挙げているのは，ゴミ芸術（Müllkunst）である．このような作品は，社会から排除され盲点として不可視化されたゴミを使って何らかのキャラクターや造形を作り出すというスタイルをもつ．もちろん，ルーマン自身が断っているように，こうした作品は実際にゴミのなかで暮らす排除された人たちとは何

ら関係ないし，それゆえにこうした人びとを直接包摂するものではない．しかし，明らかにルーマンは社会的包摂の原初形態として，芸術の観察方法を位置づけていることがわかる．

もちろんすべての芸術が，排除された人を救済するという意味で包摂を志向しているわけではない．歴史的に見ても，例えば 18 世紀末のドイツ・ロマン主義は，ファンタジーという現実には存在しないものを観察することから始まった．それは確かに社会的格差の解消という意味での包摂には程遠いものであるが，例えばゲーテの作品「若きウェルテルの悩み」では，すでに階級格差は美しくないものとして描かれてもいた．しかし 19 世紀には，リアリズムを中心として虚構ではなく現実に存在する排除された人たちへの関心が向けられたのである（Plumpe 2013）．この意味でヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』は典型的な芸術の包摂感覚を示している．彼はこの小説で描いたものは，貧困や困難ではなく，「名もなきこと（nameless things）」であると主張している．ユゴーは，社会福祉の拡充や社会的排除の実態を暴くために貧困を描いたのではなく，まず排除されたもの，目に見えぬものを描こうとした（Stallybrass 1990）．ユゴーが見えないものを見るという芸術に固有のサービスを提供しようとして，当時の貧困や困難をその対象に選んだのは明らかである．このような 19 世紀的芸術スタイルは，社会科学にも大きな影響を与えた．当初マルクスは，当時の貧困階級を近代化から「素朴な」人たちと同一視していた．明らかにそれは土着的で昔から変わらない生活を続けている農民が貧困のイメージである．しかし当時の芸術スタイルの影響のもとで，マルクスは貧困の実態を素朴な人たちとしてではなく，より動的で複雑な経緯を持った人たち（ルンペンプロレタリアート）として捉えなければならなかった（Stallybrass 1990）．ギャンブル中毒やアルコール中毒，犯罪等，貧困はより複雑な様々な経緯によって生みだされるのである．

さらにルーマン理論において興味深いのは，学術システムの位置づけである．彼にとって学術は，見えないものを見るという芸術的観察方法を応用したものとみなされているのは明らかである．論文「包摂と排除」では，まず芸術に対して言及されていることはすでに述べたが，その後に彼は，芸術とは違って学問は「事実として排除されたもの（die faktische Exklusionsweisen）」に言及する必要があると述べている．芸術的観察方法を出発点に学術的考察を始めるという彼の記述スタイルは，この論文だけに限ったことではない．芸術の社会的機能についての彼の論文のなかでは，マルクスは資本主義の幻惑を描き，フロイトは人間の無意識やトラウマを描いたように，19 世紀の社会科学の多くは「盲点」を観察するという芸術の方法を学術的に応用したものである（Luhmann 1990: 230）．しかしルーマンはここで自分の理

論こそが最もラディカルに芸術を応用している点でマルクスやフロイトよりも優れていると自画自賛している．

そうしてみると，芸術と学術の機能システムはどちらも不可視のものを可視化することを目的としているという点では一致していると言える．芸術システムの社会的機能は，見えないものを観察することにあるのに対し，学術システムの機能は新しい認識の獲得である．学術システムは，新しいことを見つけ出すという動機で新しいことを認識するのである（Luhmann 1990b: 216）．芸術も学術も極めて類似した社会的機能を持っている．両者の違いは，たんに芸術の場合，その観察があくまでも知覚の水準で，つまりイエス／ノーのいずれかに還元するという言語とは異なる感情的な水準で行われる（Luhmann 1997）のに対して，学術の場合，言語を用いて客観的ないしは間主観的な水準で観察を行うという点に違いがある．芸術の場合，誰も見ていないものを見るという目的に合致するのであれば，魔法や精霊や神話といった世界さえ観察することができるのに対して，学術が観察可能な範囲は，学術的な理論や方法論に裏づけられた間主観的な水準のみに限定されているのである．

しかしそれでも両者は，芸術と学術システムは，その類似性からポジティブにフィードバックしうる可能性がある．芸術が虚構や感情のレベルで観察したものを学術が間主観的に観察するという関係，あるいはその逆の関係がありうる．本論の想定では，このように異なるシステムのあいだの関係がより緊密になれば，社会的包摂の度合いを高めることができるといえる．

例えば社会的包摂の格となる社会福祉（ソーシャル・ワーク）と学術システムの関係性について Stichweh は，システム理論のパースペクティブから論じている．ソーシャル・ワークは，政治システムにおける福祉国家というオーダーに基づき，その実践知については学術システムからの協力を経て成立する（Stichweh 2016）．それは，排除されたものを観察し，社会的に包摂することを目的とする．その際，ソーシャル・ワークは常に学術システムの観察にさらされ，どのような方法が包摂として効果的であるか，絶えずそのアドバイスを受けることが義務づけられているのである．

もちろんソーシャル・ワークを完成された包摂システムとして見ることはできない．ソーシャル・ワークは厳密な意味では機能システムではないというところに限界がある．なぜなら，芸術や学術は，鑑賞者や読者，あるいは政治は国民というかたちで，すべての人（Publikum）がクライアントとして想定されて運営されるのに対して，ソーシャル・ワークのクライアントは排除された人という一部の人間に限定されている．この意味で，すべての人を対象とした機能システムに比べてその社

会的動機づけはいつでも相対的に弱いのである．さらにそれぞれの機能システムの管轄する範囲に比べて，ソーシャル・ワークの及ぶ範囲は比較的弱い．例えば不登校やドロップアウトした生徒の包摂は，教員（教育システム）の管轄なのか，ソーシャル・ワークの管轄なのかといった他の機能システムとの管轄をめぐる問題が絶えず生じるのである．またソーシャル・ワークにおける「道徳」の過剰な強調が，実際のクライアントが抱える問題を不可視化してしまうという事態も生じうる（Staub-Bernasconi 2017）．しかしこうしたソーシャル・ワークの限定性は，決してこれらの活動が無意味であることを意味しない．すべてのあらゆるシステムが，その限定性を持っているのと同様であるだけのことに過ぎない．しかしいずれの場合にも，ソーシャル・ワークが政治システムと学術システムの協力関係のもとでのみ機能しうることは明らかである．

社会システム理論のパースペクティブを要約すると，社会が包摂的になるか排除的になるかは，いかにその社会において不可視化された**盲点**をどれだけ観察できるかという点にかかっている．この意味で芸術と学問は，盲点の観察に最も集中するシステムであるという点で，社会的包摂の最も基礎的な役割を担う．しかし芸術や学問だけでは，例えば排除された人びとの労働市場への包摂は不可能である．ソーシャル・ワークや職業訓練等を通じた包摂が必要になる．しかし社会福祉さえ機能していれば，社会的包摂が何ら障害なくうまく機能するということにはならない．社会システム理論は，あらゆる点で完璧な包摂システムの存在を想定しないのである．盲点の観察は，確かに社会的包摂の中心原理であるが，結局は盲点の観察もまた観察という原理に基づいている以上，新たに別の盲点を生みだすことにしかならない．この意味で，広い範囲の人びとへの信頼に基づいた互酬性ネットワーク（ソーシャル・キャピタル）であれば，その盲点を克服できるという話にならない．むしろソーシャル・キャピタルには機能システムの包摂原理を不可視化してしまうリスクがある．この意味で，最も安定した社会的包摂の方法は，様々な社会システムの様々な観点に基づき，多元的に遂行されることであると言える．

6　おわりに

本論はシステム理論にパースペクティブから，社会的包摂は社会の盲点を観察することによって可能になり，逆に社会的排除は観察不能な盲点から生じるということを明らかにした．社会的包摂の度合いは，社会全体がどれだけ観察によって生じる盲点を観察するかという点に関わっているのである．

したがって排除が最小化された包摂的な社会のために必要なのは，ソーシャル・キャピタル理論が想定するように，一般化されたより広く薄い人間関係をどれだけ築くことができるかではなく，むしろあらゆる社会関係に内在する排除原理に対して，どれだけ反省的・自覚的になるかということである．この点で本論は，この反省的観察を遂行するうえでは，より集中的に観察に取り組む芸術や学問といった機能システムが重要な意義を持ちうる可能性について明らかにした．芸術や学問を通じて，我々は自分たちの日常生活では決して観察することのできない世界があるということを学ぶのであり，またそうした世界に慣れ親しみ，受容することができるのである．逆に芸術や学術システムの自律的な作動が，政治システムによって制限されている社会，例えば旧共産圏のような社会では，社会的包摂の度合いを高めることは極めて困難であったと言える．

したがって，社会的包摂の度合いを測定する際には，芸術や学術システムがどれだけ効率的に機能しているかということが重要である．これらのシステムが効率的か否かを測定する基準を明確化することは現時点では困難だが，次のような点を手がかりにすることができるだろう．もし学術システムの生産する資源が，ごく一部の人間にしか分配されていないのならば，公衆の学術的な書籍や論文の読書量は減少するであろう．また大学への進学率も重要な手がかりである．しかしたとえ進学率が高くても，大学が人びとを上層／下層へと分類する不平等再生産機関として機能しているような社会では，学歴は学術的観察の受容を示す指標にはならないかもしれない．また芸術の観察方法の受容も測定は困難であるが，美術館や演劇への来場者数に加えて，とくに余暇時間は，芸術や文学を鑑賞するための重要な足がかり（Werber 1992）であり，余暇時間の少ない社会では芸術システムの機能的効率性は減少するであろう．

芸術と学術の両機能システムが効率的に作動することで，個人の水準では自分と異なる人びとへの好奇心，あるいは時事問題や情報収集への積極さ，社会的関心の高さが増大することが想定される．それは，日常的な水準で，盲点を観察することに対する寛容さを生みだす．逆に個人レベルで社会的な関心や好奇心が低い社会では，排除された人間を観察することが動機づけられる可能性は低いどころか，このような盲点の観察は社会秩序の崩壊を引き起こすとして拒絶されることもありうる．社会的マイノリティが観察されるやいなや，ただちに彼らが攻撃対象になるという事例はどの社会においても起こりうる．このような状況下においては，芸術や学問のみならず，政治を含めあらゆる機能システムにおける盲点の観察は，拒絶へと強く動機づけられることになる．社会保障の拡充などは自分たちの生活を破壊する脅

威以外の何ものでもなくなってしまう．

いずれにしても，芸術・学術システムの機能の度合い，ならびに個人の社会的関心や好奇心の度合いといった指標が，社会的包摂の高さにポジティブな影響を与えることを本論は想定したい．広範囲な人びとへの信頼や，コミュニティ活動の参加頻度というソーシャル・キャピタル理論が想定する指標だけでは決して明らかにすることのできない社会全体の寛容さを測定することが可能になるであろう．

［文献］

Bauman, Zygmunt and Tim May, 2001, *Thinking Sociologically*, Oxford: Blackwell.

Farzin, Sina. 2008, “Sichtbarkeit durch Unsichtbarkeit. Die Rhetorik der Exklusion in Der Systemtheorie Niklas Luhmanns,” *Soziale Systeme* 14(2): 191-209.

Geenen, Elke, 2013, *Soziologie des Fremden: ein gesellschaftstheoretischer Entwurf*, Opladen: Springer Verlag.

Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press.

Hellmann, Kai-Uwe, 1989, “Protest in Einer Organisationsgesellschaft. Politisch-Alternative Gruppen in Der DDR,” Detlef Pollack and Dieter Rink eds., *Zwischen Verweigerung und Opposition. Politischer Protest in der DDR vom Anfang der siebziger Jahre bis zur friedlichen Revolution,* Frankfurt am Main: Canpus Verlag, 252-78.

Bude, Heinz and Andreas Willisch, 2006, “Das Problem der Exklusion,” H. Bude and A. Willisch eds., *Das Problem der Exklusion: Ausgegrenzte, Entbehrliche, Überflüssige*, Hamburg: Hamburger Edition,7-23.

Kronauer, Martin, 1998, “‘Exklusion’ in der Systemtheorie und in der Armutsforschung. Anmerkungen zu einer problematischen Beziehung,” *Zeitschrift für Sozialreform* 44: 455–68.

Nassehi, Armin, 1997, “Inklusion oder Integration? Zeitdiagnostische Konsequenzen einer Theorie von Exklusions-und Desintegrationsphänomenen,” Karl-Siegbert ed., *Differenz und Integration: Die Zukunft moderner Gesellschaften*, Opladen: Westdeutscher Verlag: 619-23.

————, 2004, “Die Theorie funktionaler Differenzierung im Horizont ihrer Kritik,” *Zeitschrift für Soziologie* 33(2): 98-118.

Naef, Michael and Jürgen Schupp, 2009, *Measuring Trust: Experiments and Surveys in*

Contrast and Combination, Discussion Paper No. 4087, Bonn: the Institute for the Study of Labor.

Luhmann, Niklas, 1990a, *Soziologische Aufklärung 5*, Wiesebaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

————, 1990b, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

————, 1995, *Soziologische Aufklärung 6: Die Soziologie und der Mensch*, Opladen: Westdeutscher Verlag.

————, 1997, *Die Kunst der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

————, 1998, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

Pelinka, Anton, 2012, “Populismus : zur Karriere eines Begriffes,” Sir Peter Ustinov Institut ed., *Populismus. Herausforderung oder Gefahr für die Demokratie?* Wien: new academic press, 9-20.

Plumpe, Gerhard, 1995, *Epochen moderner Literatur: Ein systemtheoretischer Entwurf*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Portes, Anton, 1998, “Social capital: Its origins and applications in modern sociology,” *Annual review of sociology* 24(1): 1-24.

Putnam, Robert D., R. Leonardi, and R. Y. Nanetti, 1993, *Making Democracy Work: Civic Institutions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press.

Putnam, Robert D., 2001, *Bowling alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon and Schuster.

Stallybrass, Peter, 1990, “Marx and Heterogeneity: Thinking the Lumpenproletariat,” *Representations* 31: 69-95.

Sturgis, Patrick, and Patten Smith, 2010, “Assessing the Validity of Generalized Trust Questions: What Kind of Trust are we Measuring?,” *International Journal of Public Opinion Research* 22(1): 74-92.

Reinbacher, Pual, 2017, “Sozialkapital als affektive Struktur sozialer Systeme,” *Schweizerische Zeitschrift für Soziologie* 43(1): 15-35.

Staub-Bernasconi, Silvia. 2017. “The problem with ‘social problems’ as domain of social work: a critical approach to the Melbourne ‘global definition of social work’ of 2014 and constructivist theories of social problems.” *European Journal of Social Work* 20(6): 958-71.

Stichweh, Rudolf, 1988, “Inklusion in Funktionssysteme der modernen Gesellschaft.” Renate Mayntz, Bernd Rosewitz, Jwe Schimank, and Rudolf Stichwen eds.,

Differenzierung und Verselbständigung: Zur Entwicklung Gesellschaftlicher Teilsysteme, Frankfurt am Main and New York: Campus Verlag, 261-93.

———, 2016, *Inklusion und Exklusion: Studien zur Gesellschaftstheorie*, Bielefeld: transcript Verlag.

Stolle, Dietlind, 2002, "Trusting Strangers: the Concept of Generalized Trust in Perspective," *Österreichische Zeitschrift für Politikwissenschaft* 31(4): 397-412.

Schwinn, Thomas, 1998, "Soziale Ungleichheit und funktionale Differenzierung," *Zeitschrift für Soziologie* 27(1): 3-17.

Werber, Niels, 1992, *Literatur als System: Zur Ausdifferenzierung literarischer Kommunikation*, Opladen: Westdeutscher Verlag.

Woolcock, Michael, 1998, "Social Capital and Economic Development: Toward a Theoretical Synthesis and Policy Framework," *Theory and Society* 27(2): 151-208.

Yazaki, Keitaro, 2018, "Sympathy or Tolerance? A Comparison between the Effects of Trusting Most People and Trusting Strangers in Asian Societies," *The Senshu Social Well-being Review* 5: 21-36.

Social Inclusion in Systems Theory:
Art and Science as Blind Spot Observation

Keitaro Yazaki
Senshu University
kei.yzk.15@gmail.com

This paper describes the model of social inclusion in systems theory of Niklas Luhmann, compared with social capital theory. Social capital theory explains social inclusion from the aspect of trust, norms and networks, but does not make clear how to avoid the negative effect of social capital which causes exclusive behavior. Social system theory explains the social inclusion from the principle of “observation”, and the extent of inclusion in depending on how social systems can observe blind spots in the society. Reflective observation of others rather than connectivity with others plays important role to foster social inclusion. At the individual level, social interest and curiosity causes social inclusion to a wider range of people, and at the societal level, if the art and the science function more efficiently, social inclusion will be promoted.

Keywords: social inclusion, systems theory, Niklas Luhmann, social capital